

青森の人びとの地域への認知とアイデンティティの探索的研究

An Exploratory Study of Tsugaru/Nanbu Identities in Aomori

山本 志都¹

Shizu Yamamoto

Abstract

Differences between Tsugaru and Nanbu have been well known among people in Aomori. This study explores how people in Aomori recognize Tsugaru and Nanbu in relation to their identities. For this purpose, recognition of the boundary between Tsugaru and Nanbu and characteristics (kenminsei) of the Aomori people were examined. Data were collected by questionnaire surveys, and analyzed using ANOVA. The results showed that there was significant effect of Tsugaru/Nanbu identities on the recognition of the boundary as well as the characteristics of the people of Aomori. On the other hand, there was no significant effect of generation difference (younger and older generations) on these issues. Also, Two-way ANOVA conducted to examine the effect of identity and generation difference on the recognition of the boundary and the characteristics of the people of Aomori concluded that there was a statistically significant interaction between the effects of identity and generation difference on “Eliminating the Boundary between Tsugaru and Nanbu Dialects.” Unlike the older generation in general as well as the younger generation with Tsugaru or Nanbu identities, younger generation people identifying themselves as the people of Aomori city do not mind putting Tsugaru and Nanbu dialects together just as “Aomori” dialect.

キーワード

津軽と南部 アイデンティティ 県民性 世代 異文化

はじめに

青森県は県西部の津軽地方と県南部に当たる南部地方の大きく 2 つの地方によって構成されており、現在においても両者の違いが「津軽は」「南部は」と何かにつけて話題にのぼる。特に津軽方言と南部方言の違いについては、筆者が青森市に在住していた約 15 年間に「南部に行くと言っているか全くわからない（青森市在住者）」や「青森市（津軽）に来て南部と言葉が全然違うから驚いた（八戸市出身者）」という感想を知人から聞く機会が何度もあった。県外出身の筆者にとっては、単語そのものに異なるものがあると思ってはいたものの、違いの多くが語尾の変化であるように思えたため、「本当に何と言っているかわからないくらいに違うのか？」と確認すると「そうだ」と言うので、「外国語くらいにわからないのか？」と尋ねると意味は大体わかるという。違いの上では大阪弁の方が差異は大きいはずであるが、同じ県内で隣接する地域間の言語の差異性が驚きを持って語られているのである。異文化コミュニケーション研究では国のレベルでの調査は多いが、このような国内地域のレベルによるものは少ない。日本の中の多様性に注目する意味においても、このような国内地域のレベルから考えることには意義がある。青森の人びとによる津軽と南部の境界認識とはいかなるものであるか、また津軽と南部という文脈において、そこに住む人びとはどのように認識されているのか、本研究では津軽と南部の地域とアイデンティティの関係について考えたい。

本研究は、青森の人びとが津軽や南部といった地域によるアイデンティティをどのように持ち、津軽と南部を区別すること、あるいは区別しないことについてどのように捉えているか、そして、地域の人びとの特徴を表すイメージとして一般に知られる県民性をどのように認知しているかについて検討した小規模な調査に基づいている。本研究を今後のより大規模な調査において検証されるべき課題を発見するための足がかりとした。

先行研究

まず、津軽と南部とは一般にどのようなものであるとして認知されているか、その区別を含めて、地理的区分、歴史、方言について概観する。また、県民性については、地域の人びとの意識に埋め込まれたイメージという視点において、アイデンティティと関連づけながら取り上げる。

津軽と南部

津軽と南部の地理的区分 津軽と南部とは具体的にはどのように分けられているものであろうか。青森県は三方を海に囲まれ八甲田連峰があることによって、気候・風土・産業・言語ともに異なる二地域に区分されており、八甲田連峰を境に日本海側を津軽地方、太平洋側を南部地方、そしてその地方で話される言葉をそれぞれ津軽方言、南部方言と呼ぶ（佐藤, 2003a）。気候的に南部は夏に冷たい風の吹くやませ（山背）、津軽は豪雪で特徴づけられる。

地域をより詳細に見てみると、津軽地方には青森市・平内町・外ヶ浜町等の東青地域、弘前市・黒石市・平川市等の中南地域、つがる市・五所川原市・鱒ヶ沢町・板柳町等の西北地域といったかつての弘前藩（津軽藩）により統治されていた地域が含まれる。南部地方には八戸市・南部町・五戸町等の三八地域、十和田市・三沢市・東北町等の上北地域、むつ市・東通村・大間町等の下北地域など、かつての盛岡藩（南部藩）によって統治されていた地域が含まれる。このように青森県を大きく2つに区分し津軽と南部とすることができるが、南部地方から下北を外して考え、3つに区分する場合もある。現在では元の盛岡藩領の地域は下北地方と三八上北地方に区別されることが多く（*e.g.* 天気予報）、南部と言うときには三八上北地方が該当する。実際に、下北については、その方言が大きくは南部に属するが下位的には南部方言から区別される（佐藤, 2003b）という方言の違いが指摘されている。また、同族集団とムラの形成過程の類型から県内を分類すると、その分布は津軽地方、下北地方、南部地方（三八上北地方）に一致する（石

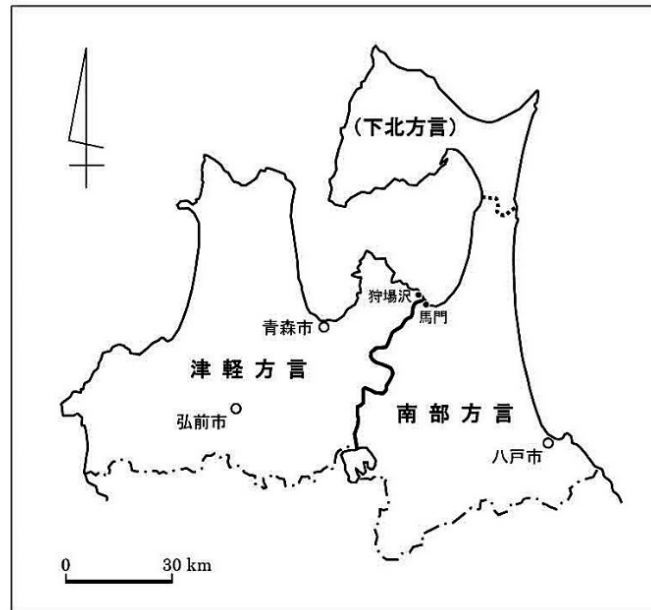
崎, 1984) という社会的な違いも示されており、下北地方には三八上北地方と異なる部分のあることがわかる。なお、平成 27 年度の国勢調査に基づいた人口および県全体における人口比率は、津軽 734,237 人 (56.1%)、南部 499,953 人 (38.2%)、下北 74,459 人 (5.7%) である。

津軽と南部の歴史的関係 津軽と南部の間には歴史的な経緯より確執が生まれたと言われている。長谷川 (2004) はその経緯について次のように述べている。南部高信に仕えていた大浦為信 (後の津軽為信) が、秋田地方の混乱に乗じた謀略により南部氏から独立を企てて 1589 年頃に成功し、加えて、豊臣秀吉周辺にはたらきかけて津軽を津軽氏のものとすることも認めさせた。それに対し、南部氏は秀吉に津軽はもともと南部氏の領土であることを訴えたが認められず、これ以来、南部氏が津軽を敵対視する関係が続くようになった。1821 年には不満を募らせた盛岡藩 (南部藩) の藩士らが弘前藩 (津軽藩) 藩主を狙撃しようとした事件も起きている。さらに、戊辰戦争時には途中から同盟を抜けて新政府側についた弘前藩に対し、盛岡藩は最後まで幕府側につき、その結果新政府に罰せられ、藩を青森と岩手の県境で分けられたという。ここから、南部が津軽を裏切り者として敵対視するようになったという歴史のあることがうかがえる。

津軽方言と南部方言 泉・小田 (2016) によると、津軽方言と南部方言の分水境界となるのは奥羽山脈で、その北端は平地続きの平内町狩場沢と野辺地町馬門の間にあり、ここは「かつては津軽藩 (黒石領、19 世紀には黒石藩) と南部藩との境界 (p. 21)」でそれぞれの番所が設置されていた所である (図 1)。泉・小田はこの分水境界の現状を調べるため、藩境を通過する青い森鉄道の駅の中から、藩境に近い駅で旧弘前藩域に当たる 3 駅と旧盛岡藩域に当たる 3 駅を選び、2012 年に乗降客にアンケート調査を行った。共通語で言う「だめ」の津軽方言「マイネ」と南部方言「ワガネ」、共通語の「雨が降るから」に見られる接続助詞「から」の津軽方言「ハンデ (雨降るはんで)」と南部方言「スケ (雨降るすけ)」、共通語の「雨が降るでしょう」に見られる推量の丁寧表現「でしょ

う」の津軽方言「ビョン（降るびょん）」と南部方言「ゴッタ（降るごった）」など、5つの方言語彙についてその使用状況を調べた結果、この分水境界が現在でも生きていたことが報告されている。

図 1 青森県の方言区画



出所：泉・小田（2016）p.21

佐藤（2003a）は津軽方言をどちらかと言えば地域差が目立たない均質な方言であるとする一方で、南部方言は青森だけでなく岩手も含んだ旧盛岡藩領という広域な地域で話される言葉の総称であり区画が複雑であるとしている。中でも半島の形が「まさかり」に例えられる下北半島の方言については、「南部方言と津軽方言ほどには明瞭でないが、地理的には、おおむねまさかりの柄の付け根の部分（六ヶ所村以北が下北方言）（佐藤，2003b, p. 49）」に方言の境界が認められることから、大きな方言区画では南部方言に属しながらも下位区画では下北方言として独立させるという見方をしている。津軽方言や南部方言には認められない南奥方言的な特徴も下北方言にはあり、佐藤は戊辰戦争に敗れた会津藩が斗南藩として現むつ市に移封されたことと関連づけている。

意識に埋め込まれたイメージとしての県民性とアイデンティティ

県民性と県民性本 テレビなどのマスメディアや雑学本で県民性という言葉を目にすることは多い。日高・石沢・近藤（2009）が国立国会図書館蔵書検索（NDL-OPAC）で「県民性」をキーワードに検索したところ（2008年11月実施）、76件が該当し、そのうち特定の県民の県民性をのみを扱っているものを除き全国規模の県民性について書かれたもののみを抽出したところ、1960年代の出版物が1点、1970年代で3点、1980年代で2点、1990年代で10点、2000年代では40点であり、増加の傾向にあった。これらのいわゆる「県民性本」は、主には著者による主観で書かれており、引用には1970年代に出版された祖父江（1971）による『県民性：文化人類学的考察』や『日本人の県民性：NHK全国県民調査』（NHK放送世論調査所, 1979）からのものが多く見受けられる。

県民性には勝手な憶測や恣意的な後付けのことが多いことから、日高らは「この種の『疑似論理』に満ちていることが、『県民性本』の議論の最大の特徴（p. 55）」と述べている。祖父江（1971）もまた県民性の「実像と虚像（p. 8）」を意識しており、沖縄といえば南国であるから熱情的と連想するなど「一般に植えつけられているイメージがもともと実際とはくいちがっている場合もある（p. 8）」ことや個人差を無視したステレオタイプへの注意を促している。したがって、県民性について考えるとき、それが根拠に妥当性のないことやステレオタイプであることに留意する必要がある。

県民性とアイデンティティ ステレオタイプである一方で、県民性が人びとの自分自身で把握する自分の性質などを含むイメージ、つまり、「自己概念」に与える影響は大きい。日高らによると、一般人の日常的な会話からマスメディアの言論におけるまで、秋田県には地域の社会事象を「県民性」を根拠にして説明する語りのパターンの定着が見られ、メディアに対しコメントする側やそれを記事にする側がその「おなじみ」のパターンを無意識に採用することが県民性言説を再生産しているという。つまり、「秋田県民は『ええふりこぎ（見栄っ張り）』だから」のように、何等かの行動の原因について言及する際、

「ええふりこぎ」のような県民性を引き合いに出すパターンが定着しているが故に、秋田の人にとってなじみ深いその語りのパターンを使って人びとは話すし、メディアもまたそこを好んで記事として取り上げる。それが繰り返されることによって、「ええふりこぎ」という県民性は再生産され、維持・強化されていくということである。

青森では「じょっぱり（強情張り）」という県民性がよく知られており、「じょっぱり精神で激動期を生き抜いた羯南（かつなん）や同時代の弘前人の高い志を感じてもらえたと思う（佐々木健・弘前市教育長・陸羯南展実行委員会委員長）」（Web 東奥, 2016 年 2 月 28 日）という新聞コメントや、弘前出身の若の里関の引退報道としてこれまでの偉業を称えながら「津軽地方で育まれた『じょっぱり』精神がなせる業に違いない」（陸奥新報 Web 版, 2015 年 7 月 28 日）とする記事があるなど、青森にも同様の語りのパターンが散見する。このことは青森の人びとによって県民性イメージの取り込みがなされていることを示しており、根拠に妥当性のないステレオタイプだとしても、自分たちのイメージを表象するものとして自己意識に埋め込まれ、アイデンティティを構成する要素になっていることを表していると言える。したがって、県民性を通じて自分たちの性質を語る文化的実践が地域社会で行われている以上、真偽とは別に県民性が自己概念に影響を与えるものであることは否定できない。

よって、本研究においては、県民性を固定的でステレオタイプの「客観物」としてではなく、メディア等の外部との相互作用、および、地域における歴史と語りの文化的実践を通じて人びとが内在化したものとして扱う。それはまた、人びとの自己意識に埋め込まれ、自己を社会的に比較し認識するアイデンティティの構成要素としても機能している。アイデンティティは自己と自己を取り囲む人間や社会との相互作用の中で醸成される。社会的アイデンティティ理論の基本的な考え方について Hogg & Abrams (1988 吉村・野村訳 1995)は次のように集約している：「1）社会とは、相互に勢力と地位関係をもつ社会的カテゴリーの異質な集まりである；2）そのダイナミックスは、経済と歴史によって規定されている；3）人々は、所属する社会的カテゴリーから大部分そのアイデンティティ（自己の意味や自己概念）を引き出している；4）かくて、集団は個

人内に存在している (p. 19)。」また、人は混沌とした情報をカテゴリーに分割することによって認知すると考えられているが、Hogg & Abrams は区別を判断する際にどの次元を強調するかがカテゴリー化に変化を生じさせ、例えば判断する中心次元が「リズム感」であるとき、黒人対白人というカテゴリーは強調化されても男性対女性のカテゴリーは強調化されないと述べている。つまり、津軽対南部のカテゴリーとは、地域の発展や歴史的背景によりその関係性が規定されたもので、地域レベルの次元で語るときにそのカテゴリーが強調化され、主観的に認識された社会的集団のカテゴリーであることができる。

青森の県民性 県民性本に現れる青森の県民性としては、意地っ張りで辛抱強く負けず嫌いという意味（日本人を知る研究会, 2002）の「じょっぱり」が筆頭に挙げられる。また、勤勉さや人情深さなど東北全体のイメージと重なるものもある。青森地域社会研究所（1985）は青森県人の気質として津軽と南部のイメージをそれぞれまとめている。津軽については、口が早くて言葉が荒い、気が短く喧嘩早い、即効性重視で時間のロスを嫌う、反権威主義で平等志向である側ら「足引っ張り」もする。南部については、無口で慎重、人見知り、時間のロスに無頓着、スピードよりも確実性重視、儉約家などである。また、津軽について大條（1984）は、暗く進歩性がなく保守的なイメージが近年まで強かったが、保守性のある反面で新しいものに飛びつく進取性もあり、ハイカラで底抜けに明るい一面も持つと述べている。さらに、津軽の文化を支えている風土精神をあらわす方言として、「じょっぱり」の他に、津軽の人はない袖を振りたがるとして秋田の「ええふりこぎ」と同様の意味を持つ「えふりこぎ」²を挙げている。青森の県民性については、県全体としての他に津軽と南部それぞれの特徴が示される場合が多いようである。

この他に、県民性本には津軽と南部の対立に触れるものもしばしば見られ、上司・部下・取引先・恋愛相手とのコミュニケーションにおけるタブーとして「南部での津軽の話題（その逆も）（p. 72, 『プレジデント』2012年3・5月号）とするものや、「何百年も続く津軽と南部の確執（p. 13）」（日本博識研究所, 2014）と紹介するものもあった。

青森のタウン情報誌『FEELER』の県民性特集の号（2008年9月号）においては、津軽の人たちが映画撮影で南部の人たちを手伝いに行った際の夜の交流会で、ある津軽の人が「もう津軽だとか南部だとか、喧嘩している時代じゃないですから、これからは仲良くやりましょう」と言ったところ「そんなことを意識しているのは津軽衆だけです。我々はそんなことを考えたこともありません」とやり返したというエピソードが紹介され、その背景として弘前藩（津軽藩）独立の歴史的な経緯が書かれていた。このように歴史に根差した確執を持つことも県民性イメージの一つとなっている。

以上、津軽と南部の認知、および、県民性について先行研究より概観してきた。青森県を津軽と南部に区分して見ることは一般的で、その境界も藩政時代の藩境であると明確であり、津軽方言と南部方言の分布もその境界に従っていることがわかった。現在の区分認識としては、かつての南部藩領を下北地域と三八・上北地域とに分け、後者を指して南部とすることが一般的である。また、藩成立の歴史的な経緯のあることから弘前藩（津軽藩）と盛岡藩（南部藩）が長く敵対関係にあり、現代においてもその対立関係は県民性本に紹介されるほど認知度の高いことがわかった。県民性については、根拠に妥当性のないステレオタイプではあるものの、地域の歴史と語りの文化的実践を通じて人びとの自己意識に埋め込まれたイメージであり、アイデンティティの構成要素として捉えられる。これらに基づき、青森の人びとによる津軽と南部の認知、および、地域に関わるアイデンティティと県民性によるイメージの認知を以下で詳しく検証したい。

方法

調査実施方法

質問紙調査のデータ収集には本研究者および本研究者が指導するゼミの学生7名が携わり³、複数の方法で収集した。まず、2011年10月22日（土）および23日（日）に、JR

青森駅および新青森駅からの許可を得て、駅舎構内の通行人を対象とする調査を行い118名からの回答を得た。通行人に無作為に声がけをし、青森の県民性のイメージに関する調査としてその場での回答を求めた。また、2011年12月に青森市にある文系大学において1年生55名を対象にしたアンケート調査を行うと同時に、本研究者と学生7名による雪だるま式サンプリングによりさらに107名からデータを収集した。最終的に合計280名（男性134名、女性146名、青森県内出身156名、青森県外出身124名）からの回答を得た⁴。

質問項目

本研究における分析の対象とした項目は、性別（男性／女性）と年齢（10代／20代／30代／40代／50代／60代／70歳以上）の基本属性の他、以下である。

地域アイデンティティ項目 回答者が出身地域としてアイデンティティを持つ地域を特定するため『わたしは〇〇出身だ』というときに『〇〇』の部分に当てはまるのはどれですか？』という教示文を示し、「津軽／南部／青森市／その他」より回答を求めた。

津軽・南部認知項目 津軽や南部といったことへの認知について、9項目を用いて自分にどの程度あてはまるかを「あてはまる（5）」から「あてはまらない（1）」の5件で回答を求めた。それらの項目は、南部と津軽を区別して考えている（「南部と津軽の区別」）、津軽の人は津軽への愛着が強いと思う（「津軽人郷土愛」）、南部の人は南部への愛着が強いと思う（「南部人郷土愛」）、一部の地域にしかあてはまらないことが「青森県の文化」としてテレビや雑誌で紹介されることへの違和感（「青森文化ひとまとめへの違和感」）、津軽弁と青森弁をまとめて「青森弁」と呼ばれることへの違和感（「まとめて青森弁への違和感」）、南部と津軽の歴史的な確執について家族や友人・知人から聞いて知っている（「歴史的確執の認識」）、南部と津軽の違いが生まれた理由を：歴史的背景によるものとする（「歴史説」）；地理・気候によるものとする（「地理・気候説」）；人びとが南部と津軽は違うと言い続けたことによるものとする（「口承説」）、である。

県民性イメージ項目 県民性イメージについては、県民性本およびマスメディアで取

り上げられることの多いイメージを参考に「人情深い（5項目）」、「無口（5項目）」、「保守的（5項目）」、「じょっぱり（5項目）」、「せっかち（5項目）」⁵の5つを定めた。「青森の県民性のイメージについてお聞きします。あなたの周囲にいる人達のイメージとしてどの程度あてはまりますか？よく知らなくてもあくまでも『イメージ』で結構です。自分の地域周辺の人たちのイメージとしてお答えください」と教示文を示し回答を求めた。選択肢には、「あてはまる（5）」から「あてはまらない（1）」の5件法によるリッカート尺度に加え、「想像がつかない（0）」を加えた。これにより、よくわからない場合「どちらでもない」が選択されるリスクを避けた。

分析対象者

本研究においては県内出身者156名のうち、イメージについて尋ねた25項目の質問のうち1つでも「想像がつかない」を選択した者を分析から外し、県民性イメージを明確に取り込んでいる者のみを対象とした。分析の対象となった124名の詳細を表1に示す。

表1 分析対象者

N = 124

性別	男性 49		女性 75					
年齢	10代 65	20代 20	30代 7	40代 8	50代 9	60代 7	70代 8	
地域アイデンティティ	津軽 33	南部 26	青森市 48	その他 17				

分析と結果

地域アイデンティティ

自分自身をどこ出身と認知しているか地域アイデンティティを尋ねたところ、津軽（26.6%）、南部（21%）、青森市（38.7）、その他（13.7%）であった。青森市は地域区的には津軽地方に属し、今回の調査で津軽と青森市を合わせて約 65%と回答者の半数を超えたのは、調査が青森市で行われた影響と考えられる。その他の回答では、むつ市、八戸市、五所川原市などがあつた。本稿において比較しやすい記述にするため、以後地域アイデンティティとして津軽を選択した者を「津軽人」、南部を選択した者を「南部人」、青森市を選択した者を「青森市民」と呼ぶ。地域アイデンティティとして青森市を選択する者が約 39%である一方で、津軽や南部と回答した者が合わせて約 48%と半数近くにのぼっており、津軽人や南部人という地域アイデンティティの根強さをうかがわせている。

津軽・南部の認知

ここでは結果をわかりやすくするために、各項目に対して「5＝あてはまる」と「4＝ややあてはまらない」と回答した人の合計数と「1＝あてはまらない」と「2＝ややあてはまらない」と回答した人の合計数を比較する。まず、津軽と南部の区別について、両者を区別して考えているかについて、区別して考えている人（57 名）は全体の 46%であり、区別して考えていない人（38 名）は 30.6%であった。津軽弁と南部弁をまとめて「青森弁」と呼ばれることへの違和感については、違和感を覚える人が 77 人（62.1%）に対し、違和感を覚えない人は 22 名（17.8%）であった。青森の一部にしかあてはまらないことが「青森県の文化」としてメディアで紹介されることに違和感を覚える人は 66 名（53.2%）で違和感を覚えない人は 30 名（24.2%）であった。津軽と南部を区別して考える人の方が多く、また、まとめて青森弁とよばれることや青森県文化とひとまとめにすることなど、区別を排した同一視に対しては、違和感を覚える人の多いことがわか

った。

郷土への愛着心について、津軽の人は津軽への愛着が強いと思うかでは、思う人が 100 名 (80.7%) で思わない人が 10 名 (8%) であった。南部の人は南部への愛着が強いと思うかでは、思う人が 76 名 (61.3%) で思わない人が 16 名 (12.9%) であった。

津軽と南部の歴史的確執について身近な人から聞いて知っているかについては、知っている人が 40 名 (32.3%) なのに対し、知らない人は 58 名 (46.8%) と半数近くにはななかった。また、津軽と南部の違いの起源に関してそれぞれどの程度支持されているか、各項目の平均値(*SD*)を見ると、歴史説 3.75 (1.13)、地理・気候説 3.43 (1.16)、口承説 3.10 (1.20) であった。歴史的に津軽と南部の間にどのような確執があったかまでは知らなくとも、何らかの歴史的な背景が原因で違いが生まれていると考える人の多いことが示唆された。

県民性イメージ

県民性イメージについて、全体と津軽人・南部人・青森市民それぞれの平均値 (*SD*) は表 2 の通りである。「人情深い」、「無口」、「保守的」、「じょっぱり」、「せっかち」について、内的整合性を確認するために信頼性係数クロンバックの α を求めた。「無口」においては「県外に出ると、方言を隠し、口数が減りそう」の項目を除く方が α の値が高まるため、この項目を除外し、4 項目とした⁶。その結果、「人情深い $\alpha=.86$ 」、「無口 $\alpha=.69$ 」、「保守的 $\alpha=.66$ 」、「じょっぱり $\alpha=.82$ 」、「せっかち $\alpha=.86$ 」であった。 α は一般的に .80 以上が望ましいものの .70 を許容する場合もあるため、ここでは無口と保守的の α がやや低いことに留意しつつも .70 に近いものとして、参考のため使用することにした。下位尺度得点の平均値(*SD*)は「人情深い 3.68 (0.69)」、「無口 2.88 (0.84)」、「保守的 3.56 (0.69)」、「じょっぱり 3.31 (0.89)」、「せっかち 3.15 (0.99)」であった。したがって、全体としては「人情深い」や「保守的」がよく支持されており、「じょっぱり」や「せっかち」がそれに次いでいる。一方で、「無口」というイメージは当てはまらなると考える人の方が多いことがわかった。

表 2 県民性イメージ

人情深い 3.68 (0.69) $\alpha=.86$ (津軽人 3.51 南部人 3.53 青森市民 3.85)	平均値	(SD)
親切な人多そう	3.90	(0.90)
通りすがりの困っている人をみると、助けてあげそう	3.47	(1.05)
来客に対し、手厚くもてなさなければ気が済まない人多そう	3.62	(1.12)
世話焼きな人多そう	3.61	(1.03)
情に厚い人多そう	3.81	(0.93)
無口 2.88 (0.84) $\alpha=.69$ (津軽人 2.68 南部人 3.25 青森市民 2.87)	平均値	(SD)
無口な人多そう	3.13	(1.27)
お酒の席では、一人で静かに飲んでいそう	2.35	(1.01)
会話では、話すより聞き役になることが多そう	3.12	(1.21)
会話の反応が薄く、何を考えているか分からない感じの人多そう	2.92	(1.16)
県外に出ると、方言を隠し、口数が減りそう ※尺度からは除外	3.27	(1.36)
保守的 3.56 (0.69) $\alpha=.66$ (津軽人 3.51 南部人 3.72 青森市民 3.65)	平均値	(SD)
新しいやり方や、変化を好まない人多そう	3.58	(1.06)
全国版のニュースよりも県内のニュースへの関心が高そう	3.63	(1.24)
青森のことはよその人には理解できないと思っていそう	3.03	(1.23)
何か慣れ親しんだものができること、変えようとしなさそう	3.77	(1.03)
色んな人と出会って刺激を受けることより、馴染みの人同士でいることを好みそう	3.77	(0.94)
じょっぱり 3.31 (0.89) $\alpha=.82$ (津軽人 3.36 南部人 2.64 青森市民 3.73)	平均値	(SD)
頑固なまでに意地を張りそう	3.66	(1.22)
命令されると、反発したくなる気持ちを持つ人多そう	3.29	(1.09)
間違いに気づいたとしても、それでよかったのだとあくまでも言い張りそう	3.23	(1.18)
助言されても、「でも...」「いや...」と素直に受け入れなさそう	3.18	(1.24)
周りに対立しても自分からは折れなさそう	3.22	(1.17)
せっかち 3.15 (0.99) $\alpha=.86$ (津軽人 3.39 南部人 2.53 青森市民 3.33)	平均値	(SD)
ぐずぐずしている人を見ると、イライラしてそう	3.38	(1.17)
常に忙しくしていて、落ち着きがなさそう	2.81	(1.19)
せっかちそう	3.19	(1.34)
「早く早く」と周りを急かしていそう	2.97	(1.26)
遅い車を見ると、急いでいなくても追い越したくなる人多そう	3.42	(1.26)

地域アイデンティティによる影響の検討

前述した津軽・南部の認知や県民性イメージは全体としてのものであったが、地域アイデンティティ別に見ることによって他の側面がわかるようになる可能性がある。そこで

地域アイデンティティが津軽・南部の認知と県民性イメージに与える影響について分散分析を行った。地域アイデンティティ（津軽・南部・青森市）を独立変数、津軽・南部認知項目 9 つと県民性イメージの下位尺度得点 5 つを従属変数とした 1 元配置分散分析の結果を記す。

主効果があったのは「南部と津軽の区別 ($F(2,104)=4.496, p<.05$)」、「まとめて青森弁への違和感 ($F(2,104)=4.043, p<.05$)」、「せっかち ($F(2,104)=7.873, p<.01$)」、「じょっぱり ($F(2,104)=17.431, p<.001$)」、「無口 ($F(2,104)=3.404, p<.05$)」であった。これを受けて行った多重比較検定 (*Tukey* 法) の結果は以下の通りである。

まず、「南部と津軽の区別」における多重比較の結果によれば、青森市 ($M=2.83$) と津軽 ($M=3.61$)・南部 ($M=3.58$) との間に有意差があり、青森市民の地域アイデンティティを持つ人は、南部と津軽をあまり区別して考えてはいないことがわかった。次に、「まとめて青森弁への違和感」において、津軽人 ($M=4.09$)、それに次いで南部人 ($M=3.96$) がかなり強い違和感を持っており、両者の間に有意な差はない。一方で、青森市民 ($M=3.38$) は最も違和感を持っておらず、津軽人と青森市民との間に有意な違いが見られた。つまり、青森市民のアイデンティティを持つ人は、津軽人や南部人と比較して、南部と津軽を区別せず、津軽方言と南部方言をまとめて青森弁とすることへの抵抗感があまり強くないことがわかる。

県民性イメージの「せっかち」と「じょっぱり」については、南部（せっかち $M=2.53$ 、じょっぱり $M=2.64$ ）よりも津軽（せっかち $M=3.39$ 、じょっぱり $M=3.36$ ）と青森市（せっかち $M=3.33$ 、じょっぱり $M=3.73$ ）のアイデンティティを持つ人の方が、自分の周りの人間を「せっかち」、「じょっぱり」と認識している。これらのイメージにおいては、青森市と津軽の間に有意な差はなく、似たような傾向が見られた。「じょっぱり」は津軽のイメージとして有名なものである。また「せっかち」もどちらかと言うと津軽人のイメージ (*e.g.* 青森地域社会研究所, 1985) である。南部人が自分の周囲の人たちに「じょっぱり」や「せっかち」のイメージがあてはまらないと考えることは、これと一致している。

一方で、「無口」イメージについては、周囲の人たちに無口というイメージがあてはまるという認識が、南部人 ($M=3.25$) の方で津軽人 ($M=2.68$) より高いことが有意差として表れた。津軽人と青森市民 ($M=2.87$) の間に差はなく、共に、むしろ周りの人たちは無口ではないと認識していることが示された。だんまりのイメージは南部人の方でややあてはまると認識されているものの、津軽人にはあてはまらないということである。全国的には青森県民が全般的に寡黙というイメージがあるかもしれないが、今回の調査では、さほど支持されないイメージという結果であった。

世代による影響の検討

テレビなどの影響により幼少から標準語に触れる機会の多かった若者世代では昔ほど方言を使っていないといわれる。若者世代では上の世代とは異なる見方をしている可能性のあることから、世代が津軽・南部の認知と県民性イメージに与える影響について検討した。10代と20代を世代低群、30代から70歳以上を世代高群として、世代間において津軽・南部認知項目9つと県民性イメージ5つに違いがあるか検証した。その結果、「津軽人郷土愛」($t=2.102, df=122, p<.05$)、「歴史説」($t=2.906, df=99.642, p<.05$)、「地理・気候説」($t=2.609, df=122, p<.05$)で有意差が見られた。世代差として現れていたのには、まず、「津軽人郷土愛」の認知があり、年代低群 ($M=4.04$) よりも高群 ($M=4.44$) での肯定度が高かった。また、津軽と南部に違いが生まれた原因への認知について、「歴史説」への支持と「地理・気候説」への支持は、共に年代高群で高く（歴史説 $M=4.13$ 、地理説 $M=3.82$ ）、低群で低かった（歴史説 $M=3.58$ 、地理説 $M=3.25$ ）。

以上より、津軽の人は津軽への愛着心が強いことに関し、全般的にそのような認識のある中でも、特に上の世代の方がより強くそう感じていることがわかった。津軽と南部の違いの起源については、そのように言われ続けたからという「口承説」への認知に世代間の差はなく、「歴史説」と「地理・気候説」への支持では若者世代よりも上の世代で高いことがわかった。

地域アイデンティティと世代の組み合わせによる影響の検討

津軽・南部の認知 9 項目と県民性イメージ 5 つに対する地域アイデンティティと世代の組み合わせからの影響を検討するために、地域アイデンティティ（津軽・南部・青森）と世代（世代低群・世代高群）を独立変数とする 2 要因分散分析を行った⁷。その結果、「まとめて青森弁への違和感」について有意な交互作用が見られたため、単純主効果の検定を行った。その結果、「まとめて青森弁への違和感」については、年代低群における地域アイデンティティの単純主効果が有意であり($F(2,101)=7.60, p<.001$)、若者世代の青森市民 ($M=3.10$) は若者世代の津軽人 ($M=4.27$) や南部人 ($M=4.04$) よりも、まとめて青森弁と呼ばれることへの違和感が有意に低いことがわかった。上の世代には地域アイデンティティにおける回答の傾向に有意な差は見られなかった。

つまり、青森市民の若者世代にとっては、南部弁と津軽弁を区別せず青森弁と呼ぶことに対し抵抗感を持つことが比較的少ないと考えられる。しかし、同じ若者世代であっても、津軽人や南部人のアイデンティティを持つ若者は強い違和感を覚えるという結果であったことから、方言に対しより愛着のあることがうかがえる。

考察

本研究では青森の人びとの津軽と南部の認知について、両者の区別、地域によるアイデンティティ、そして県民性によるイメージから検討することを試み、分析においては世代からの影響も考慮に入れた。これらに基づき以下に考察する。

まず、津軽と南部の区別に関わる境界性意識について、境界性の保持（「地域アイデンティティ」、「津軽と南部の区別」）と境界性の消滅（「まとめて青森弁への違和感」、「青森文化ひとまとめへの違和感」）から考える。境界性の保持については、津軽人あるいは南部人という地域によるアイデンティティを持つ人が 47.6%であった。また、南部と津軽の明確な区別による境界性意識を持つ人が 46%であった。それぞれ全体の半数近くに

のぼっており、このことは青森において津軽と南部の違いを意識する場面が今も多く、この区別を重視する人の多いことを示すと考えられる。この区別や地域によるアイデンティティに関しては、世代による差はなかった。

境界の消滅については、南部方言と津軽方言をひとまとめにして青森弁とすることへの違和感を持つ人が全体の 62.1%、違和感を持たない人が 17.8%、どちらでもない人は 20.1%で、違和感を持つ人の多いことが確認された。さらに地域アイデンティティによる影響の検討から、津軽人と南部人よりも青森市民の方が青森弁という呼称への違和感を持ちにくいことがわかったが、世代との組み合わせでより詳しく見ると、若者世代の青森市民においてそれが顕著であった。逆に、津軽人や南部人の若者世代では違和感を強く持っていた。また、同じ青森市民であっても世代が上の人たちでは強い違和感を持つ人の方が多い。したがって、南部でも津軽でも津軽方言と南部方言の区別が重視されている中で、若者世代の且つ自分を津軽人と思うよりは青森市民と思っている人たちでのみ、青森弁と呼ばれることへの抵抗感がなくなっていると考えられる。

一方で、若者世代であっても、青森弁への違和感を持つ者の方が全体として多いことは、方言の日常的な使用と関わりがあると思われる。方言使用について、泉・小田(2016)は「青森で東京の人に道を尋ねられた時、どの言葉を使うか」という質問で 10 代と 20 代の回答者 60 名のうち 75%が方言を使用すると回答し、「東京に行って人に道を尋ねる時、どの言葉を使うか」では 90%以上が共通語を使うと回答していたことを報告している。若者が方言と共通語との使い分けをしているとしても、県内では方言を使用していることがわかる。

以上より、津軽と南部を区別して積極的に境界性を保持する人は全体の半数程度であるが、積極的に区別しない人でも両者の区別を無くすことには抵抗感を持つ者が多いと推測できることから、津軽と南部は青森における社会的カテゴリーとして重要と言える。青森市民のアイデンティティを持つ 10 代・20 代では青森弁という呼び方を受け入れつつあることを除き、津軽と南部は世代に関わりなくその境界性を認識されるものであると結論づけられる。青森の人びとが津軽と南部そしてその方言による「カテゴリーの強

調化」(Hogg & Abrams, 1988 吉村・野村訳 1995)を行うことで、地域をめぐる社会的アイデンティティとしての津軽人や南部人が維持されている。

次に、県民性イメージについて大きくは、「人情深い」と「保守的」が全般、「じょっぱり」と「せっかち」は津軽、「無口」は南部の人びとにおいてあてはまるイメージとして認知されていた。津軽人と同じ津軽地方の出身でありながらも青森市民には境界性意識に異なる傾向が示されたが、県民性イメージにおいては津軽人と青森市民の見方に隔たりはなかった。地域に暮らす人びとの印象として持つイメージが津軽人と青森市民で共有されているということである。よって、どのイメージが地元地域の人びとの印象として当てはまるかについては、世代による認識の差はなく、津軽人と青森市民の差もなく、津軽地方（津軽人・青森市民）と南部地方という構図でのみ違いが表れたことになる。

「じょっぱり」のような方言に見られる性向語彙について、日高・石沢・近藤（2009）は、プラス性向よりマイナス性向を表す語彙量が圧倒的に多く、マイナス性向を表す語彙はその社会で好ましくないと考えられている人の性向を表すものなのであり、その方言社会の構成員に共通する性向（県民性）を表すものではないと述べている。重要なのは、地域社会でその性向に名称を与え、それを人びとがある時は忌避し、ある時は自嘲するなど、様々な感じ方で認識していることであり、さらにその語を自分たち固有の言葉として認識している点であるとも述べている⁸。「じょっぱり」も「強情っぱり」というマイナス性向を表す。しかし、先に紹介した新聞記事での「じょっぱり」の使用ではそれが肯定的な意味を持つことが注目される。先の新聞記事では、対象となる人物を地元の著名人（陸羯南）として紹介する文脈や、全国的に活躍した人物（若の里関）の郷土人らしさを強調するという文脈で使用されていた。青森の人びとのアイデンティティにおいて「じょっぱり」とは、地域内レベルでの問題意識として認識する場合には否定的な意味を持つとしても、地元地域を離れ、強調化されるカテゴリーが「青森」に対して「中央」、「首都圏」、「全国」などに広がった場合には、肯定的な意味（*e.g.*「負けん気」、「粘り強さ」）を持つ可能性がある。このような語りにおける方言の性向語彙や県民

性の現れ方から、文脈によって強調化されるカテゴリーやアイデンティティを検討することも今後必要であろう。

まとめ

本研究では、青森の人びとの地域への認知とアイデンティティについて、先行研究と調査の結果に基づいて検討し、考察を行った。今回の探索的な研究で得られた知見を今後のより大規模な調査において役立てたい。以下に、本研究の限界、および、今後の研究の着眼点として重要と思われるテーマについて述べる。

本研究の限界として、まず、サンプルの数と偏りが挙げられる。今回の調査ではサンプルが限られていたため、結果における解釈の妥当性を判断するには、今後データ数を増やしより幅広い層からサンプリングした分析を待つ必要がある。また、質問紙の調査項目も改善されるべきである。また、今回の調査における地域アイデンティティ項目では、大部分の者が津軽・南部・青森市民のいずれかを選択してており、その他を選択した者は13.7%であったが、より大規模に調査を行う場合、地域アイデンティティの選択肢として新たに下北を入れ、また弘前市民や八戸市民等を入れることが検討されるべきである。県民性項目についても、方言による性向語彙の「えふりこぎ」や「ごんぼほり（駄々をこねる）」を加えることで「じょっぱり」の認知との比較も可能になる。

さらに、今後の研究の着眼点として重要なテーマを幾つか挙げたい。まず、津軽と南部の社会的カテゴリーがどの文脈において強調化されるかを検証することである。対象となる文脈の水準が、対県内他地域、対他県、対地方、対全国、対外国など、地理的水準により変化した場合、あるいは、経済問題、環境問題、教育問題などの社会的事象に向き合う場合の、津軽人・南部人のアイデンティティの位置づけについて焦点を当てるということである。さらに、このように水準が変化することと、津軽・南部カテゴリーから離れて「青森市民」を選択する意味との関連性についても見るべきである。この感覚には世代も関与していることがわかったが、津軽や南部の若い世代が方言に愛着を持

つ中で、青森市民のアイデンティティを持つ者がまとめて青森方言という呼び方にする
ことへの抵抗感が少なかったことにも更なる調査が必要である。伝統的な境界にこだわ
らない「青森市民」という感覚がより広く多様な社会とつながっていく開かれたカテゴ
リーであるか、あるいは、津軽地方内部での新たな差別化としての排他的カテゴリーで
あるかの検証も必要である。またこれらとの関わりにおいて、一般的には否定的な性向
を示すと言われる方言の性向語彙（*e.g.* ええふりこぎ、じょっぱり）の使用がどのよう
に変化するかも明らかにされるべきである。考察において述べたように、対中央や対全
国が意識されている場合にそのような性向語彙が肯定的意味を持つ可能性がある。これ
らの研究を通じ、視野の拡大・縮小や差異性と類似性の認知についても考えることがで
きる。異文化コミュニケーションの研究領域においては、このような研究課題によって、
地域のローカル性を大事にしながらグローバルな視点を持つための異文化間能力の発達
について知見が得られるのではないかと考える。

最後に、津軽・南部の境界とそれによるアイデンティティが、現在の青森の若い世代
の人びとにも影響を与え、その語りにも表れていることを示す例を紹介する。青森県庁
では県政全般についての相談、紹介、要望、苦情の行政相談とは別に、県に対する提案
や意見を受け付ける「広聴事業」を行っており、その中の幾つかが定期的に県庁のウェ
ブ上で公開されている。その一つとして、2014年8月27日に知事が県立弘前中央高等
学校の生徒らと意見交換を行った「知事とのフレッシュトーク」（青森県庁, 2014）から
の抜粋、「南部と津軽の相互理解について」（青森県庁, 2015）がある。

・・・（略）私の父は南部の野辺地町出身、母は津軽の青森市浪岡出身なので、
私は南部と津軽のハーフなのですが、南部と津軽には大きな違いがいくつかあ
ります。私が特に目をつけたのが、性格の違いです。どちらかというと、南部
の人たちはおっとりしていて、津軽の人たちはしっかり者というイメージがあ
ります。それは言葉にも影響していて、津軽弁は南部弁に比べて少し速く、た
まに怖く感じられることもあるようです。それだけではないと思いますが、南
部と津軽の仲がそんなに良くないと昔から言われています。でも、私はその違
いを良い方向に捉えることが大切だと思います・・・。

この後2行程、北海道新幹線の開通に伴う人口流出について尋ねているが、主な意見

は「南部と津軽には違いがあり仲がよくないと言われるが良い方向に捉えるべき」である。これに対する回答は、「違いがあるというのはすごくいいことで、南部と津軽のお互いの特徴を出し合って、その違いを認め合うことが大事だと思います。その特徴を反目するのではなく、お互いに、いい方向で捉えて組み合わせたら面白くなるだろうと思います。次に、新幹線開業対策についてです」で、この 4 倍の分量で新幹線開業対策のコメントが続いていた。回答は知事の発言からの抜粋であるが、比率から察するに新幹線開通の取り組みを PR する意図が感じられる。しかしここで重要なのは、津軽と南部の区別、それぞれの特性、および、両者の関係性が、現代の高校生の語りの中に継承され実践されているということであり、同時に、提案のタイトルが「南部と津軽の相互理解について」であるという点である。県民性の再生産（日高・石沢・近藤，2009）の構図がここにもある。また、この高校生は「南部と津軽のハーフ」というアイデンティティにも言及しており、若い世代においても青森の人びとの地域を次元とした場合の自己意識における津軽と南部が依然として大きいことがうかがわれる。県民性本が数多く出版される中で県民性に関する研究はごくわずかに限られている。根拠のないステレオタイプでありながらも影響力の強いことから、県民性や方言の性向語彙は、今後さらに自己概念やアイデンティティ、ステレオタイプとの関連において研究されていく必要がある。

引用文献

青森県庁（2014）『知事とのフレッシュトーク』（平成 26 年 8 月 27 日実施）の概要について」<<http://www.pref.aomori.lg.jp/kenminno-koe/files/2014-1225-1629.pdf>>

（2017 年 12 月 10 日）

青森県庁（2015）「県政情報広報広聴『南部と津軽の相互理解について』」2015 年 5 月

11 日 <<http://www.pref.aomori.lg.jp/kenminno-koe/26F04.html>> （2017 年 12

月 10 日）

青森地域社会研究所（1985）『青森県人の気質』北の街社

石崎宣雄（1984）「吹きだまりの文化」林 達夫（編）『地吹雪と大地の中から』三省堂
泉 ゆうき・小田匡保（2016）青森県における方言の地域差と世代差—津軽・南部地方
境界地域の調査から— 地域学研究, **29**, 21-33

Web 東奥 http://www.toonippo.co.jp/news_too/nto2016/20160228010885.asp

NHK 放送世論調査所（1971）（編）『日本人の県民性：NHK 全国県民調査』日本放送出
版協会

大篠和雄（1984）「津軽人の絆」林 達夫（編）『地吹雪と大地の中から』三省堂

佐藤和之（2003a）「総論」平山輝男・佐藤和之（編）『日本のことばシリーズ 2 青森
県のことば』明治書院

佐藤和之（2003b）「県内各地の方言」平山輝男・佐藤和之（編）『日本のことばシリー
ズ 2 青森県のことば』明治書院

祖父江孝男（1971）『県民性—文化人類学的考察—』中央公論社

デイジーK（2008）「津軽漬けと南部せんべいの闘い」『FEELER』2008年9月号 フィ
ーラーステーション 14-15

日本博識研究所（2014）『よくわかる都道府県—あの県は〔こんな感じ・こんなかたち〕』
宝島社

長谷川成一（2004）『弘前藩』吉川弘文館

日高水穂・石沢真貴・近藤智彦（2009）秋田における「県民性」言説の創出と再生産 秋
田大学教育文化学部研究紀要, **64**, 51-61

Hogg, M. A. & Abrams, D. (1988). *Social identifications: A social psychology of
intergroup relations and group processes*. London: Routledge. (ホッグ&アブラ
ムス 吉森 護・野村泰代（訳）（1995）『社会的アイデンティティ理論—新しい
社会心理学体系化のための一般理論—』北大路書房

陸奥新報 <http://www.mutusinpou.co.jp/shasetsu/2015/07/37393.html>

矢野新一（2012）（監修）『『県民性』の統計相性学』『プレジデント』2012年3.5号 プ
レジデント社 17-85

¹ 本研究の調査において、平成 23 年度青森公立大学コミュニケーション演習 II の岩崎勝子氏、大坂紗矢氏、澤田紗弓氏、鈴木理貴氏、花木彰子氏、藤田制覇氏、真下奈緒子氏の協力を得ると共に、JR 青森駅・新青森駅からのご協力を得ました。ここに記して感謝を申し上げます。

² 「えふりこぎ」は津軽人の性質を表す「津軽三ふり」と呼ばれる方言の一つであり、三ふりとは「えふり」（見栄っ張り、格好つけ）、「あるふり」（ないのにある振り）、「おべだふり」（知ったかぶり）である。

³ 筆者が調査当時に勤務していた青森公立大学において、このゼミは第二ゼミ的な位置づけにあり、7 名の学生は経営経済学の専攻分野のゼミに所属しそちらで卒業論文を書いていた。したがって、当ゼミでは卒業論文を書かない前提であったため、学生の共同研究を行い分担執筆した報告書をゼミレポートとすることにしていた。ゼミレポートではデータは記述統計として報告されたのみであったため、今回新たに研究の視点を明確にした上で統計学的手法による分析を行い論文としてまとめることにした。

⁴ 2011 年の時点においては、県内出身者と県外出身者それぞれの青森の県民性に対するイメージの認識を調べると共に、比較検討することを大きな目的としていた。

⁵ 調査に携わった 7 名の学生中 6 名が青森出身であったため、県民性本を参考にしつつも青森県内出身者として自分たち自身が日頃の生活で実感しているものを取り上げてもらうようにした。「せっかち」については、津軽には「せっかち」、逆に南部には「のんびり」のイメージがあるということから、表裏の関係であるためここでは「せっかち」を入れた。

⁶ 尺度においては信頼性係数が高いことが全てではない（同じことを似た言い方で尋ねれば同じ回答が出るのは当然のため）が、この項目は他の 4 つと異なる要素を尋ねているという解釈をすることができる。他の 4 つが平常から無口であることを示すのに対し、この項目は通常話す者が県外に出たときだけ無口になる（方言を出さないように無口になる）という解釈ができるため外すのが適当と判断した。

⁷ 群間の人数（年代低群：津軽 22 名・南部 23 名・青森市 31 名、年代高群：津軽 11 名、南部 3 名、青森市 17 名）に大きな偏りがあるか確認するためカイ 2 乗検定を行ったところ、人数のばらつきはあるものの人数の比には有意差がなかった（ $\chi^2=5.114$, $df=2$, $n.s.$ ）。

⁸ 日高・石沢・近藤はまた、秋田県による「秋田人“変身”プロジェクト」ではこうした県民性（*e.g.* 「ええふりこぎ」）がプロジェクトの正当化に政治的に利用されていることを批判している。